

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

断捨離ムリ どうモノ生かそうか

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



年の瀬に引越しをしたという友人は、奥さんから彼自身のモノの整理と廃棄を厳命されました。学生時代からの度重なる転居を生き残ってきた書籍や資料類、着なくなった衣類や道具の山を目の前にして、「モノへの執着を捨て、不要なモノを減らすこと」と初の断捨離に取り組み決意をし、難儀しながらも思い切って捨てたそうです。

その後2カ月が経ち、大きな不都合はないようです。むしろモノを増やさないという感覚が快感になり、「増えそうな時にちゅうちよなく捨てることができるようになった」と喜んでいました。

自分のことを振り返り事務所の中を見渡すと、小さい会社とはいえ色々なモノがたまっています。情報誌の発行が生業ですから、その完成本はもとより、執筆のための各種ノート類、取材先や取引先の資料や印刷物が山のようになっています。その都度整理をしているつもりですが、基本的には増える一方です。

「また使うことがあるかも知れない」「これはあった方が便利だな」「これを捨てたら泣きを見るかもしれない」「せっかくなので取ってきただけだから」など、何ともあ

いまいな理由で捨てることのできなかつた様々なモノがあふれかえっています。ドカッと捨てることができたらどんなにスッキリするか、想像するだけでワクワクしますが、絶対に無理ですね。

私は出版や編集の世界にいた人間ではないのに、この仕事を始めました。そんな素人がとりあえずここまで続けることができたのは、友人らに恵まれたことなど様々な理由があります。パソコンとデジタルカメラが道具として身近にあったことも大きな要因です。

写真は現像やプリントに費

用がかかりませんし、腕の不足はたくさんシャッターを押すことで補いました。パソコンには写真を含め、過去のデータをできる限り保存しています。にもかかわらず、プリントアウトした書類も捨てられないのです。

「悠悠と。」の誌面で「廃校の活用事例」を紹介しています。陶芸家や画家、家具工房やリサイクルショップ、障がい者スポーツ普及NPO法人など、思いの濃い人たちがまなびやをよみがえらせ、色々な事情で使われなくなった校舎を、愛情を持って上手に使っています。校舎のあちこちから元気な子供たちの声が聞こえてくるようで、うれしくなります。

この時期、「きつと隙間風が厳しいんだろうな」と思いながら、事務所の中の捨てられないモノを生かせないか、頭をひねっています。